



4 果 樹

項 目	作 業 内 容
<p>(1)かんきつ類 の高品質果 実生産対策</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○かんきつ類の高品質果実生産対策 ○中晩柑類の初秋肥施用 ○極早生温州の収穫 ○かきの収穫 ○病虫害防除 ○台風対策 <p>かんきつ類の糖度とクエン酸は9月以降の天候に大きく左右される。降水量が少ないほど糖度は高くなるが、減酸は劣るためかん水管理は重要である。また、9月は台風が発生しやすい時期であるため気象情報に注意する。1か月予報では平年に比べ晴れの日が少ない見込みであるが、平均気温は高くなるため(高松地方气象台8月11日発表)、体調管理に留意する。</p> <p>ア 温州みかん</p> <p>着色が優れ、糖度とクエン酸のバランスが良く、浮皮や腐敗が発生しないことが高品質果実の条件である。園地や樹によって着果量が異なることから、摘果の時期やかん水のタイミング等に注意し、M中心の中玉生産と正品率向上に努める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○マルチ栽培の実施と被覆後の管理 <p>マルチ栽培は、糖度上昇の妨げとなる降雨を効率的に遮断でき、着色が促進されることから高品質果実生産に有効である。早生温州や普通温州でまだ被覆していない園地では、早急に敷設する。</p> <p>被覆後は時期別に果実品質を調べ、クエン酸が高ければ、10～15mm(10～15t/10a)程度のかん水を行い、減酸を促す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○浮皮軽減 <p>着色期の高温と多雨により、浮皮果の発生が増加する傾向にある。対策として、収穫までにカルシウム剤を20～30日間隔で2～3回散布する。フィガロン乳剤を利用する場合は、蛍尻期(1～2分着色期)とその2週間後(ただし、収穫7日前まで)に、2,000～3,000倍液を散布する。また、ジベレリン剤とジャスモメート液剤を使用する際はジベレリン剤1～2ppmとジャスモメート液剤2,000倍の混用を収穫予定日の約3か月前に1回散布する。</p> <p>なお、フィガロン乳剤は、連用散布すると樹勢低下が心配されるので、樹勢良好な樹に限って使用する。</p>

項 目	作 業 内 容																																												
<p>(2) 中晩柑類の初秋肥施用</p>	<p>イ 中晩柑類 「不知火」や「ポンカン」などの蒸散量の多い品種では、土壌が乾燥しすぎると酸高になりやすいので、土壌の乾燥状態に応じてかん水する。 「甘平」の裂果軽減には、少量多頻度かん水を行うのが有効である。</p> <p>初秋肥は果実肥大、貯蔵性の向上、樹勢回復等に必要である。時期や量を誤ると、十分な効果が得られないので適正に施用する。また、かん水や軽い中耕により肥効が高まる。</p>																																												
	<p>表 中晩柑類の初秋肥施用基準（8月、9月施用分）</p> <table border="1" data-bbox="483 817 1406 1205"> <thead> <tr> <th rowspan="2">品種名</th> <th rowspan="2">目標収量 (t/10a)</th> <th rowspan="2">施 肥 時 期</th> <th colspan="3">施肥成分量 (kg/10a)</th> </tr> <tr> <th>チッ素</th> <th>リン酸</th> <th>カリ</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>早生伊予柑</td> <td>4.0</td> <td>8月下旬</td> <td>7</td> <td>6</td> <td>6</td> </tr> <tr> <td>不知火</td> <td>3.0</td> <td>8月下旬</td> <td>7</td> <td>6</td> <td>6</td> </tr> <tr> <td>ポンカン</td> <td>3.0</td> <td>8月下旬</td> <td>7</td> <td>5</td> <td>6</td> </tr> <tr> <td>清見</td> <td>3.5</td> <td>9月上旬</td> <td>8</td> <td>7</td> <td>7</td> </tr> <tr> <td>河内晩柑</td> <td>6.5</td> <td>8月下旬</td> <td>8</td> <td>6</td> <td>6</td> </tr> <tr> <td>甘平</td> <td>3.5</td> <td>9月上旬</td> <td>8</td> <td>7</td> <td>7</td> </tr> </tbody> </table> <p>※「せとか」は、「清見」に準ずる。</p> <p>(3) 極早生温州の収穫 極早生温州は9月下旬から収穫が始まるが、事前に果実分析や食味調査を行い、各地区の品質基準をクリアした園地から収穫する。着色の早いものから分割採取し、品質を揃える。 なお、この時期はまだ気温が高く推移することから、少しの傷でも腐敗しやすくなる。収穫前に殺菌剤を散布するとともに、収穫～運搬～選別作業では果実を丁寧に扱い、傷を付けないよう気を付ける。</p> <p>(4) かきの収穫 「刀根早生」などの早生種が収穫期を迎える。かきの糖度は着色との関係が深く、良く着色した果実ほど糖度が高いため、早採りは慎重に、十分着色したものから分割採取する。朝露や降雨で果実が濡れている状態で採取すると果面が黒変しやすくなるため、水滴ができるだけ付いていない時間帯・天候の日収穫する。</p>	品種名	目標収量 (t/10a)	施 肥 時 期	施肥成分量 (kg/10a)			チッ素	リン酸	カリ	早生伊予柑	4.0	8月下旬	7	6	6	不知火	3.0	8月下旬	7	6	6	ポンカン	3.0	8月下旬	7	5	6	清見	3.5	9月上旬	8	7	7	河内晩柑	6.5	8月下旬	8	6	6	甘平	3.5	9月上旬	8	7
品種名	目標収量 (t/10a)				施 肥 時 期	施肥成分量 (kg/10a)																																							
		チッ素	リン酸	カリ																																									
早生伊予柑	4.0	8月下旬	7	6	6																																								
不知火	3.0	8月下旬	7	6	6																																								
ポンカン	3.0	8月下旬	7	5	6																																								
清見	3.5	9月上旬	8	7	7																																								
河内晩柑	6.5	8月下旬	8	6	6																																								
甘平	3.5	9月上旬	8	7	7																																								

項 目	作 業 内 容	
(5) 病虫害防除	<p>ア かいよう病</p> <p>発生が多い園地では、防除対策を徹底し被害拡大を防ぐ。薬剤防除は、ICボルドー66D 200倍液やムッシュボルドーDF 1,000倍液等を散布する。また、ミカンハモグリガの食害痕が発病を助長するため、ミカンハモグリガの防除も徹底する。今後の台風に注意し、防風垣や防風ネットを整備しておく。</p>	
	<p>イ 黒点病</p> <p>降雨によって黒点病菌が果実に侵入することから、伝染源である枯れ枝を除去するとともに、前回散布後の累積降水量が200～250 mm又は30日以内に防除する。「せとか」や「河内晩柑」などは、黒点病への感受性が高いことから、防除の目安を累積降水量180 mm程度、散布間隔も25日程度と短くする必要がある。薬剤防除には、ジマンダイセン水和剤600倍液やペンコゼブ水和剤600倍液等を使用する。散布にあたっては、収穫前日数などの使用基準を遵守する。</p>	
		<p>写真1 黒点病被害</p>
	<p>ウ 褐色腐敗病</p> <p>本病は果実にのみ発病する。病原菌は土壌中に生息しており、激しい降雨によって収穫前の果実に発生することが多く、特に台風の後には発病しやすい。</p> <p>常発園では、敷きわらやマルチ等で土壌中の病原菌の飛散を防止し、発病果は伝染源となるので除去する。薬剤散布適期は降雨前で、予防散布を基本にする。防除薬剤は、アリエッティ水和剤400倍液やランマンフロアブル2,000倍液等を使用する。</p>	
		<p>写真2 褐色腐敗病被害</p>
<p>エ ヤガ類</p> <p>高温少雨が続くとヤガの発生が多くなる傾向にある。落葉果樹や収穫間近の極早生温州、果皮の薄い中晩柑類では、必要に応じて防除する。</p>		

項 目	作 業 内 容
(6) 台風対策	<p>オ カンキツカメムシ類</p> <p>園地に飛来してきた成虫が果実に口針を差し込んで吸汁加害する。被害に遭った果実は早くに、斑状に着色し落果する。遅い時期に加害されると、落果する果実は少なくなるが腐敗の発生や、果肉がスポンジ状になり品質低下を招く。薬剤防除はテルスターフロアブル 5,000倍液やアルバリン顆粒水溶剤 2,000倍液等を用いる。収穫前日数など、使用基準を遵守する。</p> <p>【事前対策】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○風による倒伏や枝折れをしないよう、幼木や高接ぎ樹では支柱を立てて結束しておく。成木においても添え木等による主枝の誘引や枝つりで樹木を補強する。 ○棚仕立ての果樹は、棚の補強、新梢の誘引・結束する。施設栽培でも、フィルムの押さえや支柱などを補強しておく。 ○海岸沿いの園地では、強風により潮風害の発生が懸念される。台風通過後の樹上散水に備え、10 a 当たり 2～3 t 以上の水量を確保する。また、スプリンクラー施設や、停電に備えて発電機を点検する。 ○収穫可能な果実はできる限り収穫するが、農薬散布から収穫までの経過日数に注意する。 <p>【事後対策】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○倒伏した若木や幼木は、土壌が乾燥しないうちに起こして、支柱を立て結束する。根元が回された樹は、できる限り早く覆土し、支柱を立てる。枝折れが発生していたら、その基部から切除し、切り口にトップジンMペーストを塗布する。軽い股裂けは、ひもで結束して癒合を促す。 ○かんきつ類では落葉の程度に応じて、見直し摘果を行う。落葉の激しい樹は、着果を制限して、樹勢回復に努める。落葉50%以上の樹（被害甚）では、日焼け防止のため石灰乳等を塗布する。 ○かんきつ類では、台風の強風雨によりかいよう病の多発が心配される。また降雨量が多くなることで黒点病の発生が助長されるため、適切な防除により被害拡大を防ぐ。 ○海岸沿いの園地で、強風により潮風害の発生が懸念される場合は、台風通過後、早急に10 a 当たり 2～3 t 以上の水をスプリンクラー等で樹上散水する。

(作成：果樹研究センター)